

〈研究ノート〉

高等教育を活用した観光による地域活性化の試み

富 川 久美子

(受付 2008年 5月 9日)

1. はじめに

文部科学省は現在、教育政策によって大学教育の改革を推進しているが、その一環として現代的課題に対応できる人材育成を図っている。2004年度に開始された「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」は、その具体的な施策の課題に取組む教育機関を支援するものであり、このプログラムの課題が、現代社会における教育ニーズと認識されている。その中で、「地域活性化への貢献」は、プログラム開始以来、現在（2008年度）に至るまで挙げられていることから、これが全国で普遍的かつ恒常的な課題であることが示されよう。この「地域活性化への貢献」の課題は、大学等が身近な地域社会と組織的に連携して取り組むことを条件としている¹⁾。

一方、国土交通省では、旧観光基本法を44年ぶりに改定し、2007年1月より「観光立国推進基本法」を施行している。新基本法は、観光発展を目標としていた旧法に替わり、「地域の住民が誇りと愛着をもつことができる活力に満ちた地域社会を実現する」ことを目的としている。つまり、わが国の観光立国の実現に向け、地域においては創意工夫を生かした主体的な取組みをし、健康的でゆとりある生活を実現する観光が促進されている²⁾。

* 本稿の第3章は、『福知山市観光振興ビジョン』（2008年3月発行）に掲載されたモニターツアーの調査報告を加筆・修正したものである。

1) 文部科学省公式サイト、現代的教育ニーズ取組支援プログラム等を参照。

2) 国土交通省「観光立国推進基本法」公布：平成18年12月20日法律第117号を参照。

このように国家の教育政策および観光政策の何れにおいても地域の活性化が図られているなかで、大学が地域の組織と連携し、教育と観光を活用しながら地域の活性化をめざすことは、現代社会のニーズに即した理想的な取組みとなる。京都創成大学では、これを具現化する試みとして、「高齢者観光ツアー」の実施を福知山市商工観光部観光振興課に提案した。

2. 研究の目的

「高齢者観光ツアー」は、高齢者を対象にした福知山市内観光の日帰りバスツアーであり、学生がツアーの添乗やガイドの役割を担い、またツアーの参加者に対して世話をする、福祉の意味を含む観光形態である。本ツアーは、福知山市の観光振興ビジョン策定事業のひとつとして催行されることになった。この事業は、福知山市が2006年1月に合併したことを機に、新しく観光振興ビジョンを策定することになり、京都創成大学が2006年度から福知山市の観光振興課から委託を受けたものである。2006年にこの事業の一環として「新市観光ツアー」を実施しているが、「高齢者観光ツアー」はそれを応用したものである。「新市観光ツアー」は、日帰りのバスツアーであり、市民が新しい市の観光資源への認識を深めることに加え、個々の観光資源に対する評価を得ることなどを目的として開催された。市内のあらゆる観光資源を訪問するため、全3回、各回4コースのツアーであった。このツアーを京都創成大学および京都短期大学での教育を活用したツアーに発展させ、高齢者向け観光ツアーを企画するに至った。

「高齢者観光ツアー」の実施の意義は、大学の教育と観光を結合して地域の活性化をめざすことである。つまり、このツアーは、「高等教育の活用」と「観光による地域住民の誇りと愛着の醸成」、を実現することが大前提となる。まず、前者の「高等教育の活用」については、2つの高等教育機関、京都創成大学と京都短期大学での教育の活用である。観光振興が重要課題の一つとされる北近畿において、地域で唯一の4年制大学である京都創成大学では2007年度より観光領域が開設され、観光の人材育成を図ることに

なった。ここでの観光教育は、学生が地域の観光、すなわち観光資源や観光の実態、住民の観光への意識などを学ぶことが基本となる。そのため、ツアーの実施によって学生に実習の機会を与えることになる。一方の京都短期大学には介護福祉士専攻が設置されており、介護福祉士をめざす学生が実習を重ねている。ツアーでは高齢者の世話をすることから、学生がその教育の成果を生かすことができるだけでなく、一般の高齢者と交流をもつ体験が社会教育となる。次に、後者の「観光による地域住民の誇りと愛着の醸成」に関しては、市民が地元の観光資源を知ることで地域の良さを再認識し、郷土愛への意識が次世代に引き継がれることになる。これは、ツアー参加者だけでなく、京都創成大学および京都短期大学の学生においても、福知山市や周辺地域の出身者が卒業後も地元で活躍する地元志向の学生が多いため、同様のことが期待できる。さらに、「高齢者観光ツアー」は、家にこもりがちな高齢者に観光の機会を提供し、また若者との交流の機会も提供できるため、地域貢献に繋がる。

「高齢者観光ツアー」は、以上のように、国の施策である「高等教育の活用」および「観光による地域住民の誇りと愛着の醸成」を実現する条件を満たしていると推察される。しかし、それを実証するにはツアーを複数回しかも長期間に実施する必要がある。

そこで本研究では、「高齢者観光ツアー」をモニターツアーとして調査実施し、その結果から「高等教育の活用」および「観光による地域住民の誇りと愛着の醸成」に繋げる観光形態であるか、その可能性を検証する。そして、今後のツアー実施にあたっての課題を考察する。

研究目的を遂行するため、これまでみてきた前提条件を整理し、調査における具体的な検討課題を項目として挙げる。1. 大学と地域の組織との連携がとれているか。2. 京都創成大学の観光教育が活用されているか。3. 京都短期大学の介護福祉士養成のための教育が活用されているか。4. 地域住民（参加者と学生）が地域の良さを再認識するか。5. 高齢者と若者（学生）との交流が図られているか。を検証し、加えて6. 今後の実施に向

けた課題を考察する。しかし、2. の京都創成大学の観光教育に関しては、まだ専門教育が開始されていないため、6. の課題に含めて考察する。調査は、ツアー参加者に対しては学生が対面でおこなったアンケートや聞き取り、観察などの方法でおこなった。また学生からの感想・意見もツアー終了後に収集した。

3. モニターツアーの実施

「高齢者観光ツアー」のモニターツアーは、2007年11月29日に実施された。この企画には、福知山市の観光振興課、京都創成大学、京都短期大学が共同で行い、行程には、高齢者の嗜好、最小限の歩く距離、バリアフリーのトイレが設置された施設、などを考慮した。訪問先にも趣旨を説明し、受け入れ態勢の協力を得た。参加者は、自ら歩ける、介護認定1から2までである、ことを条件とし、介護者同伴でも参加可能とした。参加費は昼食代と保険代のみとした。参加者の募集は、社会福祉協議会の支援により、高齢者が集う定期的な会合で呼びかけることにした。ツアーの訪問地が福知山市の北部方面であることから、福知山市南部の三和町地区にある「いきいきふれあいサロン」で募集をしたところ、参加者数が定員（当初は20名）を超えた。ツアーに同行する学生は、京都創成大学では、観光の専門授業がまだ開始されていないため、学生の専門分野に関係なく、授業に支障のない4回生4名とし、京都短期大学では介護福祉士養成過程の最終段階にある2回生4名とした。京都創成大学の学生は、事前に行程の内容を学習し、しおり作り、集金、バスの中での説明などの準備をした。ツアーに同行した教員は、京都創成大学から3名、京都短期大学から2名であり、参加者と学生をサポートする役目を担った。

当日のツアーの参加者は31名、ほとんどが女性で男性は6名であった。ツアー行程は、以下のとおりである。

三和いきいきふれあいサロン（10：00発） 芦田均記念館（10：20－11：00）
鬼瓦公園・真下飛泉資料館（11：20－12：00） 大江山グリーンロッジ（昼食）、

富川：高等教育を活用した観光による地域活性化の試み

日本の鬼の交流博物館（希望者のみ）（12：15－13：35） 二瀬川溪流（経由）
観音寺（講話）（14：15－15：15） 三和いきいきふれあいサロン（15：30着）
（写真：1－4参照）

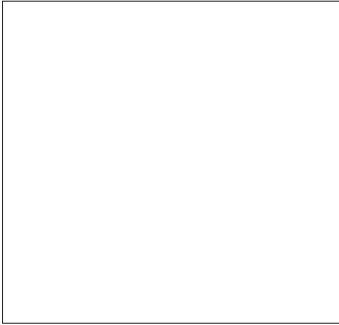


写真1：学生と会話する参加者
芦田均記念館にて

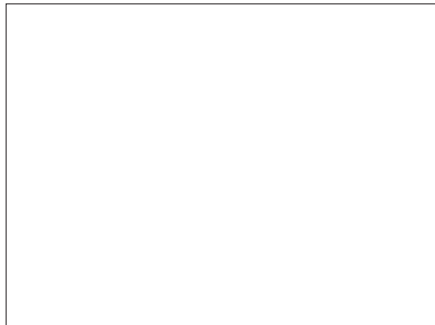


写真2：職員解説を聞く参加者
日本の鬼の交流館にて



写真3：市職員の解説を聞く参加者
説明鬼瓦公園にて



写真4：学生と会話する参加者
鬼瓦展示場にて

ツアーは10：00から15：30までの5時間半の間、三和町から大江町への全行程約100kmの距離であった。訪問した芦田均記念館、鬼瓦公園・真下飛泉資料館、日本の鬼の交流博物館は、全て市が運営する施設であるため、それぞれの職員が案内・解説した。途中経由した山間地では車中から最盛期の紅葉を観賞することができた。

学生は、バスの中では補助席に座った。これは、参加者との交流を図る

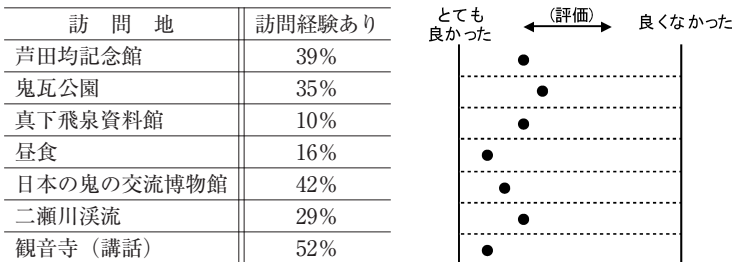
ためであり、また聞き取り調査も兼ねていたためである。聞き取りの質問項目は、予めアンケート票に示してあり、学生が各参加者から聞き取った内容を記入するようにした。有効回答数は参加者数と同数の31である。

調査結果から、参加者の年齢は71歳から87歳、平均年齢は77歳であった。旅行や出かけることが好きな参加者が87%を占め、実際日ごろから出かける機会が多い者も81%を占めた。しかし、ツアー参加の理由は55%が「誘われたから」を挙げており、自主的な参加ではなく、仲間と一緒にいることが参加の動機となっている。また、集合場所を駅に設定した場合に、参加が可能とした者は26%でしかなく、駅までのアクセスが個人では難しいことが明らかになった。

それぞれの訪問地の評価は、おおよそ「とても良かった」、「良かった」、「ふつう」、「良くなかった」に分類し、訪問経験と併せて、図1に示した。また、訪問地評価の理由となるコメントの内容を、同様のものを合わせて表1に示した。

それぞれの訪問地におけるツアー参加以前の訪問経験は、観音寺が参加者の半数ほどを占め、その他の訪問地も1割から4割程度ある。したがって、訪問経験がある場合、既に知っているところを訪れるため、評価はそれほど高くない可能性もあったが、実際は、非常に評価が高かった。とくに評価が高かった昼食は、高齢者向けのメニューが好評だったためであり、観音寺においても講話の内容が高齢者向けであったことで、参加者

図1 高齢者観光ツアーの訪問経験の割合と訪問地評価



富川：高等教育を活用した観光による地域活性化の試み

表1 ツアーの訪問地に対するコメント

訪問地（コメント数）	主なコメント（同様のコメント数）
芦田均記念館（10）	もっと時間が欲しかった（3）
鬼瓦公園（6）	大きい（2）、寒い（2）
真下飛泉資料館（8）	見学できてよかった（3）
グリーンロッジ（昼食）（10）	おいしかった（5）、野菜が主でよい（3）、量が適当（3）
日本の鬼の交流博物館（9）	話が良（面白）かった（5）
二瀬川溪流（通過）（5）	紅葉がきれい（4）
観音寺（講話）（9）	良い話だった（7）

が感銘を受けた感想が多かった。その他の訪問地に関しても案内人の説明があったことが評価を高めた要因となったといえる。その一方で、僅かにみられた苦情が、時間的な余裕のなさや寒さに関するものであった。しかし、ツアーの全体的な満足度はかなり高かったといえる。

その他のツアー全体に関する意見として、12名の参加者の声が記録されている。その多くが「楽しかった」、「また参加したい」などの意見であり、「説明が聞いてよかった」など、身近でも知らないところが分かってよかったとする感想も複数ある。さらに、学生に対する感想であるが、18名の参加者が感想を述べている中で、15名が「学生と一緒に楽しかった」、「話が出来てよかった」、「親切だった」、「心強い」など、学生と一緒にあったことが好評であったことが分かる。その他の3名は学生に対する励ましの言葉であった。「また学生と行きたい」という感想も2名いた。

このように、ツアー全体の評価も、学生に対する評価もかなり高かったことが明らかになり、本ツアーが今後も継続されることを願う参加者が多かった。

次に、ツアーに対する学生の意見である。ツアーに同行した8名の学生には、終了後に意見を書いてもらったが、感想を含めた反省や今後の改善点などが出された。反省点は自分の仕事に関してであり、改善点はツアー

の時間的余裕や寒さを指摘したものが多かった。各学生の感想を要約したものが以下である。

京都創成大学の学生 4 名

- A. 今日は寒かったが、全体的に良かった。喜んでくれる人が多かった。
- B. バスの中では楽しく話しをすることができた。参加者の方々も学生と話ができて、今までにないツアーで楽しかったという声を聞いた。観光場所も身近だけど良い機会ですツアーとして楽しめた。
- C. 準備不足だったが、一日ガイドの経験ができてよかった。もっとしっかり資料を読み、準備をすればよかったと反省している。お年寄りの方はとても楽しんでいただいたようで、良かった。ガイドをほめてくれたり、孫に似ていると言ってもらったり、会話をするのも楽しく、参加してよかった。福知山にいながら、初めて行く場所ばかりだったので勉強にもなった。
- D. 日頃は自分の家族としか高齢者と関わる機会がないが、たくさんの方とふれ合うことが出来て良い経験になった。また、地元や近くであるのに行ったことのない場所ばかりで、思ったより勉強になって良かった。

京都短期大学の学生 4 名

- A. いろんな方と話ができていい勉強になった。いつも実習などでは重度の方やコミュニケーションがとれない方などと接する機会が多く、コミュニケーションがとれたことがよかった。
- B. 実習で行く施設の利用者とは異なり、違った視点で高齢者を捉えることができ、一緒に楽しめた。寒さがあったとも感じた。介護予防のことから考えてもこういった高齢者とのふれあいが高齢者の生きがいになるきっかけとなったり、認知症予防にもなると考えさせられた。
- C. 参加者全員と話ができなかったのが残念だった。バスの両どなりの方から嬉しい言葉が聴けたのでとてもうれしかった。今回のツアーに参加することができ、また一つ自分の力になった。皆さんの笑顔を見る

富川：高等教育を活用した観光による地域活性化の試み

事ができた。高齢者の観光ツアーはこれかれも続けて欲しい。お金の管理からガイドまで学生がおこなっていたのがすごいと思った。

- D. はじめはアンケートのことで不安もあったが、時間が経つにつれ参加者の皆さんとうちとけ、楽しむ余裕ができた。皆さん本当に元気で、実習で弱っている方を見ている分、元気をもらった。たくさん話もできて、とても楽しい一日だった。

全学生が、高齢者との交流が良い経験となったことが理解できる。とくに京都短期大学の学生にとっては、実習で会う高齢者が、体が不自由であったり認知症であったりする方が多く、健康的な高齢者と交流できたことが非常に良い体験となっている。京都創成大学の学生には、福知山市での学生生活4年目にして初めて地元の観光地を訪問したことも良い経験となっている。

以上のようなツアー実施への経過および調査の結果から、本研究の検討課題であった6項目に関して考察する。

1. 大学と地域の組織との連携がとれているか。

大学、短大と市当局で協議しながらツアーの企画や参加者募集をし、ツアーには教員、学生、市職員が同行した。訪問地では市の職員による解説もされた。このような協力態勢が功を奏して参加者によるツアーへの評価が高まったと考えられ、また大学にとっても行政との連携が不可欠であることが確認された。

2. 京都創成大学の観光教育が活用されているか。

観光の専門的な授業が開始されていないにもかかわらず、学生が課題に取り組み、ガイドや添乗の役割を担うことができた。また学生は地元の観光資源やツアーの形態を認識した。

3. 短期大学の介護福祉士養成への教育が活用されているか。

実習で接する高齢者とは異なる健康な高齢者と交流できたことが、今後の実習にも役立つ非常に効果的な教育となった。

4. 地域住民（参加者と学生）が地域の良さを再認識するか。

参加者、学生とも市内の観光資源を再認識し、また資源に対する評価も非常に高かった。これにより、地域の良さの再発見に繋がった。

5. 高齢者（参加者）と若者（学生）との交流が図られているか。

参加者と学生の交流は、十分に図られ、かなりの好評を得た。日常生活において高齢者と若者が交流する機会があまりないことが明らかになり、双方にとって良い機会を提供したことになる。

6. 今後の実施に向けた課題を考察。

ツアー全体の評価が高かった中で、寒かったことや、行程が急がし過ぎたとの批判があった。ツアー設定の時期に問題があり、予想した以上に高齢者への配慮が必要であった。しかし、今後もツアーを継続して欲しいという要望が強い。今回は、観光振興ビジョン策定事業での実証実験としてツアーを実施したが、今後の定期的な実施に向けて、実施主体の確立が第一の課題である。

本研究において検討課題として挙げた 6 項目は、上記のとおり概ね達成された。したがって「高齢者観光ツアー」は、「高等教育の活用」および「観光による地域住民の誇りと愛着の醸成」に繋がる可能性が高いことが明らかになった。さらに、「高齢者観光ツアー」は、高齢者と学生の交流をとおして「楽しめる」教育の活用方法であり、高齢者にも「楽しみ」の提供ができることが観光を利用した最大の利点である。これによって、教育機関が支援する新しい地域貢献型の観光形態を提示することになった。

4. ま と め

国家の教育政策および観光政策の何れにおいても地域の活性化が図られているなかで、大学が地域の組織と連携し、教育と観光を活用しながら地域の活性化をめざすことは、現代社会のニーズに即した理想的な取組みとなる。

富川：高等教育を活用した観光による地域活性化の試み

本研究では、これに即した試みとして「高齢者観光ツアー」のモニターツアーを実施し、このツアーが「高等教育の活用」と、「観光による地域住民の誇りと愛着の醸成」、に繋げる可能性があるかを検証することにした。また、今後の定期的なツアー実施にあたっての課題を考察した。その結果、「高齢者観光ツアー」は、国の施策に即した観光形態である可能性が高いことが明らかになった。今回実施されたモニターツアーでは、高齢者と学生の交流をとおして双方にとって有意義なものとなり、また、教育機関が支援する新しい地域貢献型の観光形態を提示することになった。

現在、日本では高齢化や人口減少が問題となっているなかで、とくに地方の自治体では大きな課題である。このような福祉の要素を含んだ観光形態や、近隣地域を含めた地域における人的交流を促進する観光形態は、日本の多くの地域で活性化に貢献する手段として、導入されることが望まれる。